

留学体験記

日本語日本文コース 1901224 渡辺理子

二月初旬、空港へ到着し言語も聞き取ることができずに、空港の職員の人に初っ端から迷惑をかけてしまったことで、自分の語学力の低さが身に染みて不安でいっぱいだった。しかし、台湾の人々は皆、私が外国人で中国語が少ししか理解できないと分かると日本語や英語を使ってくれたり、ジェスチャーを交えて教えてくれたりした。その優しさに触れたことで、心が挫けずにいられたと思う。新幹線に乗って高雄に移動するときには、隣の席の女性は私が日本人だと分かると、翻訳アプリで親切に話しかけてくれた。新幹線を下りた後、タクシーで移動するときには、その女性がタクシーの運転手に伝える必要事項などをメモに書いて渡してくれた。その女性は、よく日本へ旅行に行くのだと語っていた。私は、海外に初めて出たことがきっかけで、日本人に生まれた恩恵を身近に感じた。この留学では、母国ではない台湾で、外国人として、日本人として暮らすことに対して向き合う時間が多かった。

大学の授業が始まると、様々な国籍の学生と出会うことが増えた。文藻外語大では、五専部など四年大学とは異なる学年システムもあり、国籍以外にも年齢も異なる人々と交流する機会があった。他の日本人留学生も多く、普段関わらないようなタイプの人とも話すことがあった。私にとって、様々な人と出会うことはかなり刺激的なことで、その生活に慣れることに必死だった。加えて、授業形式も日本と異なり、違いに慣れることに苦労した。中国語を英語に訳すことや日本の文化を中国語で学ぶこともあり、今までやってことがないようなことをした。その中で、ヨーロッパ系の人と話す際に中国語で話すことがあり、新鮮だった。公用語として英語が一般的ではあるが、台湾で中国語を学びコミュニケーションで必要な言語として中国語を選択し話すことで、外国人同士の見えない繋がりのようなものを感じたのだ。私がもし英語が堪能であれば、経験できなかったことかもしれない。また、中国語を学んでいたが、台湾での「中国語」の分類についても考える機会があった。留学に行く前に学んでいた中国語は、中国語のことを「漢語」と訳していたが、台湾では中国語のことを「中文」と訳していた。ルームメイトに台湾ではなぜ「中文」と言うのかと聞くと、「漢語」は中国で使われる中国語というイメージが強く、台湾で使う中国語とは少し異なるため、台湾では「中文」というのだと教えてもらった。また、大学の中国語センターの名前は「華語中心」という名前だった。この「華語」もいわゆる台湾の中国語を指す言葉だと教えてもらった。しかし、「華語」の方が公的な場面で使うことが多いらしい。そのため、大学の中国語センターは「華語中心」という名前なのだ。留学に行く前は、台湾と中国の中国語の違いについて、日本における方言のようなものだと捉えていたが、現地で話を聞くと台湾の人々は明確に分類していたため、留学に行かないとこの感覚はわからなかっただろうなと思った。単に中国語や大学の授業を受けるだけでは

なく、そこから疑問を解決したり経験を積んだりすることで得られるものが重要なのだと改めて理解できた。

私は、この留学を経て、中国語のレベルも上がったと感じたが、自分自身が成長することができた。自分のことは自分でしなければならない環境の下で、学び暮らすことは貴重な経験になった。中国語のレベルも日本にいて勉強するより格段に成長スピードが速かった。今の中国語のレベルに満足せず、帰国してからも中国語の勉強に励んでいるが、生の中国語に触れる機会が少なくなったぶん、台湾での生活を恋しく思う瞬間もある。語学力を身に着けることは自分の強みになることをこの留學生活の中で実感した。この経験は、きっと日本で生活する中でも、役に立つ場面が出てくるだろうと思っている。この経験を生かし、これからの日本での生活も頑張っていきたい。



(文藻外語大学の正門)



(台湾で人気のお菓子)